

神戸商大卒業。ユアサ商事(株)入社、営業本部長、取締役、監査役を経て平成10年退社。

「私の夢」

40年に余る長い会社生活を終え、残された第二の人生をどのように送ればよいのか迷いの日々がしばらく続いた。

さいわい自宅から遠くない地に NHK の放送大学があり、年齢を問わず門戸が開放されている事を知った。戦後の混乱期に学生生活を送り、落ち着いて満足な教育を受けなかった私は、青春の日を取り戻す為に入学を考えた。

併し、いざ学ぶとなると会社生活を終えた今、実務的な学問は今更必要とも思えず、結局内面的な精神生活を充実する為に哲学、文学、宗教等の分野に限定された。思い惑っていた所、知り合いの住職から薦められたのが京都西本願寺経営の中央仏教学院であった。

妻が寺の出身であり、母が親鸞聖人を開祖とする熱心な真宗の門徒という環境にありながら、全くといってよい程宗教には関心はなかった。

そのような私が入学を決断した一因に、30年以上も前の南米でのある出会いがあった。

当時ペルーのリマに駐在していた私が、隣国ボリビアに出張しラパス空港に降り立った時、呼吸困難に陥っている初老の日本人を発見し、ホテルに案内し看病した事があった。

ラパス空港は高度4000メートルを越え、酸素が希薄の為、高山病に陥る人が多い事で有名であった。その老人は、千葉市大蔵寺の住職で大正大学の教授と淑徳短期大学の学長を兼ねておられる長谷川良信先生であった。

ブラジルのサンパウロ郊外の浄土宗分院での布教活動を終えての帰途であった。

その夜、健康を回復された先生から色々と宗教論を承った。その時の内容は殆ど覚えていないが『宗教は決して死後の為にあるのではなく、現世をいかに安らかに生き抜くかの為にある』との言葉だけは鮮明に心に残っていた。

かくして放送大学を止め、中央仏教学院への入学を決意した。仏教学院に籍をおいて2年の歳月が流れた。後一年すれば、卒業し得度し僧籍を得る事が出来るだろう。併しながら、私の心は迷っている。難しい仏教用語が際限もなく現れる。果たして何人の人がこの難解な言語を理解できるのだろうか。宗教は理論ではない、信仰であると言う。併し、現代人にそのような盲信を説得できるのだろうか。現代の言葉で、現代の世相を背景に昔の経典も又現代風にアレンジしてこそ、現代の人々に受け入れられるというものだろう。

卒業後の抱負を求められ

『過疎地での老人の医療問題が騒がれている。人間の肉体的治療もさる事ながら、それ以上に心の治療、心のよりどころを求められているのではないだろうか。後継者としての僧なき寺がふえており、死後の不安に悩む老人が多いと聞く。可能であれば将来廃寺の僧として、老人の友として些かでも役にたきたい』との希望をのべた。

私の住む千葉県でも、宗派に関係なく、僧のいなくなった廃寺は結構多い。

過去からの世襲制を順守する事は酷というものかもしれない。寺に生まれたと言うだけで僧になり、人々の心の糧になれるような時代ではない。世間の風波を経験し、葬式仏教の僧としてではなく、目的意識を持った僧の出現を今日程求められる時代はないのではないだろうか。社会生活を経験し、人間関係の複雑さを身をもって経験した後、宗教に目覚め、あるべき姿の僧として人々の心の友となる事こそ、最も望まれる姿ではないだろうか。

雪に閉ざされ、過疎の僻地の荒れ果てた寺院で、孤独な老人の話相手として、最後まで生を楽しむ生活を夢みる昨今である。